



ノーフォールト

名取道也 国立成育医療センター

怖い。分娩を扱うことはこんなに怖いことなのだろうか。家族を犠牲にし、寝る間も惜しんで新しい生命の誕生のために一生懸命やってきた私が、一瞬のうちに法廷の冷たい壁の前に立つ。

この本は私の親友でもある現役の産婦人科医により書かれた小説であるが、著者は医師以外の多くのかたに読んでもらいたいと考え、普段書きなれている「論文」ではなく「小説」を書いて世に送り出した。産婦人科医や助産師にとり、これはすぐ隣にある日常であり、それも心が凍るような日常である。最善を尽くしていても起きる、予想もしなかった悪い結果。患者や家族はそれを医療事故と呼ぶ。小児科医が足りないと言われて久しいが、最近のほんの3年で産科医の不足がそれをあつと言う間に追い越してしまった。今や「お産難民」という言葉もしばしば聞かれるようになり、被害は医師の疲弊を越えて患者に及ぶようになった。しかしこの産科医不足の問題は表面でなかっただけで、ずっと前から進行していたことが、限界を越えたたとたん噴出しただけである。

なぜ産科医は不足したのか？ この本にある内容こそが、産科医不足の原因の最も重要な点を指し示している。では最も重要な原因とは何か？ それは「患者の期待する医療のレベル」が現実を上回っていることに、患者も裁判官もマスコミも気づかないということである。

医療訴訟を題材に問題を語りかける



岡井 崇 著

定価 1,680 円(本体 1,600 円+税 5%)
四六判／早川書房／2007 年

「患者の期待する医療のレベル」が出来上がってくるプロセスは単純ではなかろうが、以前と比べて患者が持つ医療に関する情報量は飛躍的に増えた。もちろんこれはインターネットによるものである。ネット上にある情報には正しいものもあれば、誤ったものもあるが、何より多いのは不十分、不正確な情報である。分娩についてネット上にある情報のキーワードは「満足なお産」「良いお産」「幸せな産声」「自然なお産」などであり、どこにも「あなたが死ぬかもしれないお産」「赤ちゃんが死ぬかもしれないお産」「赤ちゃんに障害が残るお産」

などはない。このようなキーワードがないのは当然であるが、情報が偏っていて、大事な情報が妊婦や社会に伝えられていないのも事実である。

このように偏った情報が現実を上回る「患者の期待する医療レベル」を作り出し、それがブーメランのように医療関係者のもとにやってきて法廷に立たせるのである。この偏った情報の提供者の一部は我々である。今産科医不足への対応として政府は助産師にがんばってもらいたいとアピールしている。これから否が応でも産科医療の前面に立って活躍していかざるをえない助産師の皆様には、この本を読まれて提供すべき情報とは何かをもう一度考えてみていただきたい。患者や社会に提供する情報に偏りがあれば、結局まわりまわって自分に帰ってくるのである。